

シクラメンの栄養診断を活用した収量・品質の安定化

1 課題の目的

シクラメン栽培では、生育期の肥培管理は最終的な収量・品質に大きく影響を与える。そのため、シクラメン栽培において栄養診断*の実施を定着させ、収量・品質の安定化を目指す。さらには、栄養診断の活用を手段として生産者同士の技術交流を活性化させる。

*植物樹液等の窒素濃度を機械で測定することにより、その時点での生育状況を把握する技術。肥培管理の検討に役立つ。

2 課題の背景

- (1) シクラメンの販売状況は平成7年頃から需要の低下を主因として全国的に低迷し続けている。かつては大鉢を主体とする高品質シクラメンが求められたが、現在では販売単価も低下しており、取引先の需要に合わせた品質のシクラメンを適期に出荷することが重要となった。
- (2) 海匝地域では、14戸（うち5戸は後継者がいる又は後継者がすでに経営主）によりシクラメン9万5千鉢、ガーデンシクラメン25万7千鉢が生産されており（平成30年度、農業事務所調べ）、管内の鉢花生産でも主要品目となっている。一方、上記のため、経営上シクラメン以外の品目の重要度が増している。他品目の栽培の兼ね合いにより、管理不足や作業の遅れによりシクラメンの品質・収量の低下が発生していた。
- (3) 群馬県では約15年前からシクラメン生産に栄養診断を取り入れており、品質・収量の向上による経営改善に繋がっていた。管内では栄養診断を活用している生産者はおらず、栄養診断の導入により収量・品質の安定化が見込まれた。
- (4) 管内の鉢花生産はすべて個人販売である。そのため、生産者同士の交流する機会、特に技術研鑽を図る場が少なかった。

3 普及活動の経過

(1) 栄養診断の導入対象の検討及び栄養診断の実施

栄養診断を実施するにあたり、実施を勧める対象を検討した。個別巡回により各生産者の栽培状況や今後の経営意向の把握に努め、栄養診断の実施に意欲的であり、かつ技術的に伸びしろの認められる後継者世代4戸を対象とすることとした。近隣地域での実施状況を参考にし、1か月に1、2回程度、個別に訪問して栄養診断を実施した（実施年度 平成27、28年度）。

(2) 栄養診断の実施の定着と栄養診断結果の活用

栄養診断の結果を十分に活用するためには、3年間以上のデータを収集することが肝要である。そのため、栄養診断実施の定着及び結果の活用を目的とし、仕上げ鉢に鉢上げ後、出荷直前までの6月から10月において、7日から10日の間隔で個別訪問を中心として栄養診断の実施を支援した。また、結果をグラフ化し、栽培環境を考慮

の上、肥培管理に関する指導を念入りに行った（実施年度 平成 29 年度～）。

(3) 検討会の開催

香取農業事務所と連携し、月に 1、2 回程度、海匠・香取地域の栄養診断実施者 5 戸を集め合同で栄養診断を行い、データの共有や今後の肥培管理について意見交換及び検討を行った。実施場所については各生産者の作業場を順番に回るように設定し、生育状況の確認も併せて行えるように工夫した。

また、実施者が所属する県鉢花協議会シクラメン部会と連携し、栄養診断活用事例の事例発表等を積極的に促した（実施年度 平成 29 年度～）。

4 普及活動で得られた成果



合同で栄養診断を実施



生育状況について意見交換

(1) 栄養診断実施の定着

栄養診断を行うことで、現在の植物の生育状況を把握することにつながった。また、栄養診断と肥培管理のデータを数年蓄積することで、自身の管理の手癖を理解するに至った。栄養診断の活用の効果を理解し、実施者すべてが今後も栄養診断を活用していきたいとの意向となった。

(2) 収量・品質の安定化

2 戸では追肥時期の適切化による病害虫の発生の減少により、栄養診断導入前と比較して収量・品質の安定化が図られた。2 戸のうち 1 戸は下位等級の割合が減少し（50%→20%程度）、もう 1 戸では出荷鉢割合の増加とその安定化（毎年 85%以上）が図られた。また、1 戸では後継者の栽培技術の習得・向上につながった。

(3) 生産者同士の交流の活性化、波及効果

検討会により技術交流を図ることで、後継者世代の交流が盛んになった。検討会以外でも自発的に連絡を取り合うようになった。また、他生産者 1 戸から栄養診断を活用したいとの希望が挙がり、実施するようになった。

5 問題点と今後の展開方向

栄養診断の活用がシクラメンの品質・収量の向上につながることが確認できた。今後は農家相互で栄養診断を継続して行うためのグループ化等の仕組みを作っていく。

また、地域の他生産者にも導入が進むように情報提供を図る。

（旭グループ 普及指導員 古川 航大）